

〔翻 訳〕

H. インヘトフェーン

## 女 性 農 業 者 の 研 究

——伝記的アプローチの適用——\*

(訳) 石 原 豊 美

### 農村研究における

#### 伝記的アプローチの遅れ

戦後ドイツの農村地域で相当量の調査研究が行なわれ、また調査が行なわれたのは口承伝統 (oral tradition) のある代表的な地域であったが、農村社会学者たちが口述史 (oral history) や伝記的な語り (biographical narration) を体系的に利用しようと試みるようになったのは、1970年代の終わりになってからであった。

伝記の方法が等閑視されてきたのは、先駆者がいなかったためではなかった。すでに19世紀に、農村の家内工業についてのすぐれた社会学者であった M. Schnapper-Arndt は、農村研究のなかでライフストーリー (life stories) がいかに活用され得るかを例証している (Schnapper-Arndt 1975, xix 頁および 187 頁)。大恐慌期に工場の立地する村での大量失業の影響をとらえた有名なマリエンタール研究でもまた、データを収集し、深層にふみこんだ情報 (in-depth information) を得るために、伝記が用いられた (Jahoda et al. 1975, 26 頁および 64 頁以下)。

しかし、こうした初期の伝記的アプローチは継承されなかった。

伝記的アプローチの利用が途絶えたひとつの重要な理由は、ナチズムのイデオロギーと政策にあった。

ヒットラー政権は、個人や家族がアーリア

族の血をひくものであるかどうかを確認し、体制の理想化された歴史、すなわち疑似聖人伝を産み出す一手段としてのみ、過去に関心を抱いた。過去は不滅の帝国の未来を構築し正当化するための資源だった。つい最近の歴史を再構成したり個人のライフストーリーを保存するための伝記には関心がなかった。伝記に関してはそのように束縛があり、ナチスはこれに関心をもたないどころか政治的な理由から抑圧しさえした。

第三帝国の崩壊後、伝記は脱ナチ化という状況のなかで新たな政治的意味をもつようになった。人びとは脱ナチ化の証明書を得るためにナチ期の自らの生活を多かれ少なかれ防衛的なものにつくり上げなければならなかった。このために、とりわけ誰もが互いを知りすぎるほどよく知っている田舎 (country-side) で、またもや恐怖と警戒の念が生じた。

このように政治と否定的に関わっていたために、伝記を書いたり研究したりすることへの制約や嫌悪さえもが生じた。

農村地域においてライフストーリーもまた多くの注意を受けることがなかった。第二次世界大戦後、ドイツ連邦共和国の農村社会学が、シカゴ学派の伝統を周辺化し数量的な方法とりわけ調査 (surveys) に強く傾斜したアメリカ社会学の理論モデルに大きく影響されたためである (Planck 1989, 394 頁)。

農村地域の研究に伝記的な方法が採用されなかったもうひとつの理由は、近代化という問題に対して農村社会学がとった態度にあっ

た。著名な社会学者たちが、ナチズムの根源のひとつであるとみられる権威主義的なパーソナリティーがとりわけ田舎に巣くっているはずだと論じた。そして農村の人びとの、教育による近代化と啓蒙を説いた。したがって、‘暗い’過去に拘わることなく、ヨリよい未来に焦点があてられた。

このことが、当時非常にプラグマティックな政治に関連する研究を集中して行っていた農村社会学者たちの関心と一致した。彼らは都市と農村の相違を農村の側の欠陥と文化的遅れとして定義し、ラディカルではあるが即時的で効果的な解決策としての都市化と産業化を主張した。

したがって、彼らは、環境や態度を構造的かつ同時に提示する——そうすればこれらの次元を数量化し、現実と理想の状態のあいだのへだたりが縮小していくのを測定することができた——方に、ヨリ多く関心を抱いた。

にもかかわらず、伝記的な志向への関心をよみがえらせたのは近代化それじたいであった。

近代化が及ぼした主要な影響は、ひとつには、個人化の過程である。この過程で、自らの社会心理学的発達を顧みることの重要性が強調され、ライフストーリーが‘伝記化’されるようになった。伝記は独自の制度 (*institution sui generis*) となった (von Engelhardt 1990, 22 頁)。

一過程、一概念としての近代化の危機さえもが (Beck 1986), 1970 年代のライフストーリーへの関心の復興に重要な貢献をした。農村の人びと、そしてとりわけ農民たちが、近代化がもはや安全とヨリよい生活への着実な進展を意味しないと認識したのはその時期のことであった。

新たな形の不安定さがあり、また正しい意思決定をと迫ってくる圧力が常にあった。また何よりも、いまや、農村社会の多くの部分にとって近代化の進展が自らの崩壊につなが

るにすぎないであろうことが明らかになった。人びとは、悲嘆や抵抗や、生きるに値する将来を設計するために過去の生き残りの例を見い出す必要といったものに動かされて、さまざまな水準の伝記的な省察へ向かっていた。

20 世紀に起きたあらゆる断絶と異様な変化に対して、自伝を書くことによって自分自身のために何らかの連続性を確立しようとした人たちがいた。この変化について省察し、こうした過程のさまざまな局面に対処するための方法を生み出しはじめた研究者もいた。こうして農村研究は、いわゆる‘伝記の運動’——1970 年代の終わりにあられ、社会学における質的な分析方法の一般的隆興のなかにありまたその隆興によって強化されていた——を利用することができるようになった。多数の伝記的アプローチについて議論がなされ、適用がなされた (Bertaux & Kohli 1984, 221 頁以下。von Engelhardt 1990, 19 頁以下。Voges 1987)。

こうした方法上の変化から、農村女性や女性農業者についての研究にも影響が及んだ。

1970 年代の後半まで、農村女性についての調査研究は農村社会学の亜流にすぎなかった。したがって農村女性の研究は、同じように数量的な方法を用いて行なわれ、特に小規模農の後進的な女性たちに帰せられる‘小農性 (petty peasantry)’ (*Kleimbäuerlichkeit*, van Deenen 1982, 9 頁) という最後の安住の地に進歩をもたらすことに関与していた。

しかしその後、女性研究のなかでみられた質的な側面への志向と質的な分析手法の発達に支えられ、新たな刺激を得て、農村女性の研究においても質的な分析手法や伝記的な観点が採用されていった。

1970 年代末以降、農村女性自身が書いたり発案した異常なほど大量の伝記的資料が出版されており、またそのなかのひとりがドイツ連邦共和国において近年もっとも広く読まれる女性著者となるという驚くべき成功をお

さめたのは、確かに偶然によるものではない (Wimschneider 1984。これまでに 170 万冊が売られている)。

### データ収集の手段としての 伝記的な方法

2つの研究プロジェクト——1つは近代化に直面する小規模経営の女性農業者の状況に関するものであり、もう1つはナチ期の農村家族、およびとりわけ農村女性の状況を研究することを目的としたものであった——で伝記的な方法を用いた多少の経験について要約しておこう (Inhetveen & Blasche 1983。Inhetveen 1987)。

文献のなかでは‘伝記的な方法 (biographical method)’ということばはさまざまな意味で用いられている。が、少なくとも社会的なデータを収集する一方法として伝記的な情報を収集し分析するアプローチと、個々の行為者と社会的諸要因から成る社会的な構成としての伝記を分析するアプローチとに大別することが有効である (Fischer 1989, 98 頁)。

第一の方法は、通常、数量的な調査を深く掘り下げた調査と組み合わせ、なぜ個人がある一定のやり方 (manner) で行為し思考するのかについて推測し、思考あるいは行為の内的な合理性あるいは宇宙観 (cosmology) を判定することができるようにするために選ばれる。この意味の伝記的な情報によって日常生活や劇的な状況のもとでの態度と志向に発生的 (genetic) で通時的な側面が加えられ、表面的なデータに広がりや深みを得られるだろう。

私たちは 1976 年に開始した小規模農の女性に関する最初の研究プロジェクトで、この多少なりとも手段的な意味での伝記的な方法を用いた。

農業の近代化が及ぼす影響について尋ねる

なかで、私たちは、それまで暗黙のうちに受容し不問に付していた研究の背景としての近代化というパラダイムについて熟考し、内省し、問うようになった。私たちの目的は、小規模農の女性たちが近代化にどのように適応したのか、またその新しい要請に対してどのような物的、社会的、精神的コストを支払ったのかを見定めることにあった。私たちは、伝統的な生活世界のなかで成長した女性たちが、どのようにして——近代という時代に単純に適応するのではなく——対立し矛盾する新しい世界に対処してきたのかを発見したかった。女性農業者がもっているものの見方や意見を単純に‘後進的である’とか‘非合理的である’と分類してしまうことなく、彼女たち自身の合理性——私たちはこれを伝記的な合理性と考えている——にまで立ち入って理解したかった。

したがって、数量的な方法のみに依拠できないのは明らかであった。広く行なわれている社会志向の調査を伝記的な情報で補うことが、目的を達成する一方法であるように思われた。

私たちは、専業兼業の双方を含む小規模農の女性 133 人にインタビューした。このなかには都市近郊や遠隔地に住む、さまざまな年齢の女性が含まれていた。

半標準化された調査票を用いて、私たちは彼女たちの現在の状況に関する特定の質問をした。また、関連するひとつひとつの項目について伝記的な情報を求めて質問をした。すなわち、どのような経緯をふんで農業者になったのか、どのようにして農作業を学んだのか、結婚後、どのようにして夫の農場に適応していったのか、どのようにして近代的な農業のやり方を学んだのか、といったことについてである。

他にもいくつか質問をすることで、私たちは、それぞれの女性の人物像の主要なアウトラインを再生し、発生的で通時的な背景をも

った行為や思考を解釈するためのデータ群を収集し、また女性農業者の‘標準的な’あるいは‘平均的な’伝記のようなものを構成するための準拠点を確立しようと試みた。

インタビューを受けた女性たちは、私たちの伝記に関する質問に非常に率直に答えただけでなく、自らの行動あるいは志向について説明する際にしばしば自ずと伝記上のフラッシュバックをとり入れた。このことを指摘しておくのは重要であろう<sup>(1)</sup>。

彼女たちが伝記を語る際に脱線をしたことには評価すべき体系的な価値があっただけでなく、伝記的なアプローチが日常的な解釈の重要な形態であることも示していた。自分自身あるいは他者を理解するということは、しばしばその人の伝記的な起源をのぞきこむことを意味した。多くの事実の‘因果関係’が、それらの‘一時性’や伝記の歴史的な展開と同一視された。彼女たちは何故何かが起きたのかを語ることをせず、それがいつ、どのような一連の出来事のなかで起きたかを語った。

個々人の特性はしばしば家族の伝記の特殊性から説明される。例えば、夫が家事を手伝うか内向的な人であるかは、家族の歴史や感情面あるいは精神面で家族が受け継いできたものと関連づけることができる。しかし、事実の伝記的なルーツをみることは、しばしばそれらが不変的な性質のものであると認めることを意味する。

伝記的な資料は、女性農業者の実態を解釈し理解するために、どのように用いられ得るのだろうか。以下に、私たちが収集した資料のなかから2つの例をあげることにしよう。

### 農 場 観

農村社会学においては、存立が不安定な中小規模の農場がもっとしばしば手離されないのは何故なのかが、繰り返し問われる。私たちが行なった調査でも、女性農業者の約80%が、農業をやめたくないと考えているこ

とが示された<sup>(2)</sup>。

理由を尋ねると、彼女たちは農場は“パンかご”で、“仕事の場”で、“生計の手段”を与えてくれる、と語った。農業が他の職業と同じくひとつの職業あるいは仕事であって、一定以上の所得を保証すべきものであると論じたのはごく少数の人たちだった。

大多数の人が、農場を所有する意義に関して伝統的になされてきた手段的な議論を提起した。すなわち、人は農場の助けがあって、祖先がそうしてきたように生きていくことができるだろう、子供たちもまた——農業に専従することによってではないだろうけれども——両親よりも何ほどこよい暮らしをするだろう、と。

さらに詳しく検討してみると、彼女たちが提起したこの議論は、述べられた目標に到達するための最も有効な方法という意味では手段的ではない。そうではなくて、彼女たちのこの論は、伝記的な要約なのだ。

ドイツで40歳以上の殆どの女性が鮮明に経験している窮乏の時代（2度の世界大戦、ナチズム、戦後の再興期）には、農場をもっていることが実際に何らかの利点とそしてある種の基本的な安全とを提供した。あらゆる外的な危機——例えば、私たちの調査期間中の失業率の上昇——が、伝記的な経験が真実であることを確認しているかのようであった。

状況が好転している時期にあってさえ、彼女たちの見方によれば農場の価値は減じられはしなかった。人の人生は周期的（cyclical）である。豊作のあとには凶作がくるという聖書のモデルのように。

また、人は農場を所有することを有難く感じている。したがって、伝記的な経験を一般化し解釈すれば、常に伝統的な農場観が強化されることになるのである。

伝統的な農場観を固定化するもうひとつの事実もまた、伝記的なこまごまとした出来事のなかで明らかにされる。

女性たちの農場への特有の志向は、農場での厳格な社会化（socialization）——同様に厳格な家族での方向づけとともに、若い少女時代に彼女たちの内に焼き付けられている——の帰結のようである。

規範が、祖先から譲り渡されてきたものは家族のなかで保持されなければならない、と教える。もし放棄されれば、これまでの世代、両親、あるいは自分自身が投下してきた労働がすべて無駄になってしまうだろう、と。

女性のばあい、両親の農場を相続することはまずなく通常は婚出してしまうのだが、彼女たちはこの態度を夫の農場に転移（transfer）していった。

農場が世代を超えて連続していくことは、あらゆる労苦に対する報酬であり、しばしば人が自らの生涯のなかでは得ることのできない報酬のようである。

この農場での社会化の重要な帰結として、農場との殆ど共生的な関係が形成される。「農場と私——私たちは共に成長しました。」

そうした絆を断ち切るのは困難である。それは人生の構成要素である。伝記的な断絶を極小化し、家族の伝統を継続させるために、女性たちは引退のときまで農業者であり続けようとする。（これが彼女たちが抱いている展望なのだというを注記しておくのは重要なことである。彼女たちは子供たちのために、伝統的な観点と近代的な観点とを大変現実的な方法で結びつけて二重三重の戦略をつくり出していた。）

私は、このことは多くの農家家族にとって近代農業の真の危機であると考えている。

通常の世代交替を別にすれば、農場を手離すことは、将来展望のみならず、家族のストーリーと伝記的な連続性、そして農場をもつ者は何が起こきようとも生きながらえるであろうという考え方を中心とするひとつの宇宙観を放棄することをも意味する。

しかし、あらゆる危機が積極的な挑戦を行

なっている。

女性農業者に関する伝記的な資料は、農業と家族のアイデンティティを維持するために犠牲にせざるを得なかったパーソナリティのさまざまな面について洞察することを可能にしてくれる。彼女たちが語ったストーリーは、若い少女の、朝もっと遅くまで眠っていたい、高校へ行きたい、楽器を演奏したい、外の世界へ出ていきたい、といった夢や、若い女性の願望やフラストレーション、また次世代、とりわけ娘たちへの投影（projection）の過程の記録である。

したがって、伝記は人が家族全体の精神的情緒的な遺産に気づき、また、一方で農場の連続性と家族の連続性を、もう一方で農場の連続性と自らの連続性とを区別する助けとなるだろう。そうしたことについて省察するのは一研究プロジェクトの範囲を超えるものであるが、現在新しい意思決定や選択を行ない新たなアイデンティティを形成しつつある多くの女性農業者および農家家族にとって、非常に重要である。

### 労働の質

伝記的な方法の実り多さを示すもうひとつの例が、女性農業者の仕事の分析のなかに見受けられる。

数量的な方法は確かに仕事に費やされる時間、分業、好まれる仕事のタイプ、身体をつかう仕事か機械仕事かの選好、専門的従事者と兼業的従事者、年長の女性と若い女性のあいだの仕事への態度の相違、についてのたくさん情報を提供し得る。

しかし、仕事が具体的で生き生きとした出来事となるのは、質的な方法を用いることによってこそである。

農業労働の産業化によってもたらされる大きな変化は、労働の過去の形態と現在の形態を呼び起こして比較するなかで、あるいは自ずと生じてくるフラッシュバックとして、と

りわけ伝記的な資料のなかにあらわれてくる。

調査をすすめるなかで、私たちはしばしば伝統的な労働が詳細に記憶されていることに驚いた。以下の議論ではそうした仕事の記憶に関するいくつかの調査結果を提示しよう。

女性たちの仕事の多くは、今日でもそうであるが、肉体労働、ヨリ正確には身体を用いる労働であった。女性農業者の仕事は女性の労働であり、また農業労働であることから自然の過程と密接に関連している。このことが特殊な形態の反復をうみ出す。女性たちが言うように、それは常に同じであり、また決して同じものではない。このために、仕事が特殊な形で強く印象づけられることになっているように思われる。

すなわち、こうした記憶は頭脳だけでなく身体全体にたくわえられてきた。仕事の経験は、まさにそれがしばしば激しい労働であったために、身体の中に技能や傷害や、あるいは外傷としてたくわえられる。

仕事を通じて経験された成功と誇り、傷み、苦しみは大変詳細に記憶される。農村女性たちの仕事は、自然と深く関わっているために、伝記的なエピソードのなかで生命を与えられる強い審美的な経験と結び付いている。くり返される重労働に伴う音や匂いや画像や感覚が、女性たちの記憶のなかでその時と同じように鮮やかなようである。仕事の活動を記憶するすぐれた能力は、文字通り身体の記憶の産物のようなものである。

仕事の社会的な面さえ記憶のなかに見い出される。

伝統的な仕事は非常に印象的でよく記憶される性格をそなえた、共同の仕事かあるいは極度に孤独な仕事であった。仕事は家族員あるいは隣人の顔や個性、用具や道具のよさ、心のなかにはっきりした跡を残す長くて多事な道のりと結び付いている。

仕事史 (work histories) はまた、村の微妙な社会的均衡や社会的ネットワークのなか

で行なわれる相互作用の諸規則 (例えば、粉摺りの共同作業の際の) への詳細な洞察をも提供する。したがって、仕事の伝記は、ある地域に特殊な、仕事の伝統的な形態から近代的な形態への技術的な変化に関するデータのみでなく、過去における農村の社会的な生活世界を視覚化するためのデータをも提供する。

仕事の伝統的な形態と近代的な形態の比較は、伝統的=耐えがたく激しい、近代的=ヨリすぐれているという荒っぽい等式を超えて、記憶のなかにたくわえられている主体自身の具体的な経験へと返っていかねばならない。そのような仕事史に照らすことによってのみ、私たちは、例えば女性たちが引合いに出す聖書のことわざ (“人の一生は、たとえ喜びに満ちたものであったとしても苦労なのだ”) のような、たくさんのパラドックスを理解し始めるようになる。

農村社会における仕事史の収集と分析は、将来性ある実り多い研究領域となり得るだろう。

### 社会的構成物としての伝記的な語り

さきに伝記的な方法の2つの類型——1つは伝記的な情報を社会的な事実として用いる手段的なものであり、他の1つは伝記を社会的に構成された行為者中心の構成物とみなすヨリ理論的なものである——を提起した。

1980年に開始した補充調査のなかで、私たちは第二の方法を採択する機会を得た。私たちは現代史のひとつの出来事、すなわちナチズムと第二次世界大戦を、遠隔地にある小さな村の女性たちがどのように経験し対処したかについて研究しようとした。それは記録資料によって裏付けられたひとつの口述史となるはずのものだった。

私たちは多くの理由から、農村女性たちのライフストーリーを軸としてそれを展開する

ことに決定した。

第一に、ナチズムを独立した話題として取り上げるのは非常に微妙なことのようであった。そこで私たちは、この時期をライフストーリー全体の文脈のなかに包み込むことにした。これは後に全く適切であるとわかった、ひとつの方法上の‘トリック’であった。特に、この時期が女性農業者たちの人生全体に照らしてみても、また特定の時間の地平においても強く修正されていることが明らかになった。

第二に、私たちが最初のプロジェクトで出会った農村女性たちの、ストーリーを語りたいという願望や語りの技術からみて、人生を研究する視点は好都合なように思われた。

三つめの理由は、ヨリ学術的なものであった。1980年代の初頭に、‘ナレーティヴ・インタヴュー’の方法が広く議論されていた(Bertaux & Kohli 1984, 224 頁)。ナレーティヴ・インタヴューは、2つの部分——初期の適切な刺激を与えるための質問に誘発された、インタヴューによるかなり広範囲にわたる語りの部分と、語りのなかで提示された付加的な関心の対象となる出来事についてインタヴューアが質問をし、明らかにする部分——から成っていた。多くのオーラルヒストリアンが語りの方法の実践的な有効性を確信しており、私たちもまたそうであった。

このアプローチを特に伝記的な語りに適用して、私たちは12の村の44人——そのうちの3分の2が女性で、3分の1は男性であった——にインタヴューをした。収集した資料は、最初の研究プロジェクトと同様の方法で吟味された。

私たちは全てのインタヴューを再生することもしなければ、フォーマルなテキスト分析の最たる深みへと入り込むこともしなかった。インタヴューによって提供された伝記的資料のみにもとづいて分析をする必要はなかった。というのは、私たちは地方の役人たちによ

て書かれたり収集された、信ぴょう性のある豊富な記録資料へと返っていくことができたからである。

この枠組みのなかで、私たちは小さな村の地域社会のなかで女性たちやその家族がどのように第三帝国の挑戦に対処したのか、田舎にあって‘小さな伝統’と‘小さな政治’との関係はどうであったのか、ナチの政策がどのように入ってき何を約束したのか、ナチズムに直面するのにカトリックとプロテスタントではどのような相違があったのか、といったことについて明らかにしようとした。

本稿の焦点は多かれ少なかれ方法論的なものである。ここでは女性農業者たちが伝記的な、そして語りの方法に、どのような反応を示したかについて述べることにしよう。こうした反応を分析するなかで、私たちは彼女たちの人生の物質的・精神的諸層との関連を見出す。

#### 一女性農業者の人生：

##### “何も特別なことはない”

驚いたことに、女性農業者たちは自らの人生のストーリーを語るように依頼されたとき最初何ほどか当惑した。彼女たちはたいてい、伝記的な節目をもった年代記的なごく不十分な枠組み——出生地、両親と農場の状態、きょうだい、学校、聖餐式/堅信礼、日曜学校、結婚、子供の誕生——だけを語った。“それがまさに私の人生なのです”。ある女性は“自らの人生のストーリー”を私たちが書き換えたところではわずか4ページにおさまってしまうところで終え、それから私たちが促したり聴いたりすることによって励まされてそれを90ページ分にまで展開していった。

農村女性にとって‘自らのライフストーリー’を自発的に提示するのは困難である。彼女たちの殆どが、自分自身の個人的な人生には村の他の女性たちから区別されるほど特別なものは何もないと確信している。

年長の女性は皆“たくさんのことを経験”している。唯一の相違はレトリックにあるように思われる。実際のところ、最初、年長の女性農業者のライフストーリーは非常に似通った構造をもっているようにみえる。彼女たちが‘ノーマルな（標準的な）伝記’のようなものを構成するのは比較的容易なことである。

しかし、さらに詳しく検討すると、この多かれ少なかれ伝統的な人生の文脈においてさえそのような標準化を困難にする多くの特徴が見い出される。

要するに、女性たちは自らのライフストーリーの基礎である個性性を、実際非常に重要であるとも、またとりたてて評価されるべきものともみなしていないのである。彼女たちにとっては、平等性と互酬性という規範によって構造化された‘私たちという文脈’（von Engelhardt 1990, 39 頁）のなかで行為し思考することの方がずっと重要であった。だから、人生のストーリーを語るように要求されたとき、彼女たちは初めて、特別なものであってはならぬとする規範との内的な葛藤を克服しなければならなかった。

#### 人生の画としてのライフストーリー

女性農業者たちは最初伝記を典型的な定点から成る短い年代記として表現したが、もっと語るように問いかけ励まされると、ライフストーリーを展開して人生の画あるいはコラージュあるいは——ある典型的な女性の作品をさすならば——‘人生のパッチワークキルト’を生み出した。

たくさんのストーリーが語られた。病気や事故や、不測の死のような‘鍵となる出来事’。早ばつなどの、自然現象。日常生活の小さなエピソード。結婚式のような、ライフサイクルのなかの節目と結び付いた出来事。

ストーリーを語る際の原理はよく構造化された組織（organization）というよりはむしろ

る連関（association）である。ある種の論理が常にはたらいっているが、それは必ずしも明示的ではない。というのは、それは農村社会の特有の宇宙観に関連しているから。

女性農業者たちは何故自らのライフストーリーを体系的に組み立てるよりもパッチワークのように形づくることを好むのだろうか<sup>(3)</sup>。

それはひとつには、明らかに、実践が欠如しているためである。近代的な諸制度からなおへだたりがあるために、女性たちには広範囲にわたって年代に沿って連続的に自らの人生について語る機会がこれまで殆どなかった。彼女たちは個人的に非常によく知っている人びとに語りかけることに慣れており、年代的な順序にしたがって話すような形のライフストーリーをつくり出す必要がない。

もうひとつには、何人かの著者たちが論じているように、言葉の厳密な意味での伝記は、人が人生を特定の諸条件の下における一過程として、また自ら個人的に影響を及ぼすことのできる何かとして経験するときのみ、適用可能だから（Bahrdt 1975, 24 頁）なのだろう。このようなことが可能になるのは、個人が自らを農村社会から切り離して人生のなかで独自の道を歩んできているときのみであるように思われる。この仮説にしたがえば、ブルジョワジーの社会と資本主義が‘人びとを’伝統的な絆から‘解放し’、時間と空間のなかで移動を可能にし個人的なものとしたという点において、初めて伝記が成立する前提条件をつくり出したことになる。

移動が可能になることは、人びとが自らの人生をひとつの道のりおよび過程として視覚化するための一必要条件である。そうして初めて、人生はもはや単に疑似季節的なリズムに反応するのではなく、個人が回顧して年代的に秩序づけることのできる個人的で紛れない運命、また伝統的なライフサイクルの諸段階とは別の何か、となる。

しかし、年長の農村女性たちの人生には、



移動性と、またしたがって一過程として人生をとらえる認識がない。通常は、人生のなかで一度の重要な‘移動’があるにすぎず、それは結婚の際の、村のなかの他の場所へ、あるいは隣の村への移動である。しかし、生まれた家族から離れたとしても必ずしも断絶——上に述べた意味での一過程としての人生という見方に通じるであろう——は生じていなかった。近隣から婚入してきた80歳の女性は、なお、自己を生家——旧姓と結び付けている——と同一視していた。“私は今、そしてまだずっと、アンナ・キストです。”

伝記が‘画のような’形をとるもうひとつの理由は、それが公的な世界の出来事からへだたっている点にある。伝記の研究という観点からは、農村の女性たちの人生の大部分が‘歴史化されてい’ないということができよう。

このために聴き手はしばしば、何かがいつ起こったかよりもどこで起こったかについてより正確に知ることになる。出来事のタイミングよりも位置に焦点が定められる。

家族や村の出来事の時は、しばしば回り道をして定められる。というのは、聴き手が知っている、照合できる日がないから。例えば、村に最初のトラクターが来た1939年は、聴き手に都合のよい第二次世界大戦の勃発ではなく、この農村女性の結婚の年と結び付けている。

他方で、世界的な政治的重要性をもつ出来事は、しばしば家族と村の準拠体系にしたがって整理される。彼女たちは、こうしてある条件の下で新しい日付けを生み出すことができる。農場が譲り渡されたのは1935年だった。“そしてそのとき（1933年ではなく！）ナチスがきました。”

女性農業者たちの伝記は、何かつぎはぎで不正確で‘大きな政治’よりは地域の‘小さな伝統’に関心をもつものであるように見受けられる。公的な歴史的な始まりと終わりのあ

る特定の時期に関心を定めている口述史のアプローチでは、まず研究対象となっている諸個人の時間構造、時間意識および準拠体系の分析がなされなければならない。

このことから、私たちは、女性たちの伝記に連続した年代記が存在せず、彼女たちが記憶を‘キルト’として提示することを好む最後の主要な理由にゆき着く。すなわち、年長の農村女性の人生を支配している時間構造は、周期である。全ての線形的な（linear）時間の尺度が周期的な形につくりなおされる。自然のリズム、生成的な周期、礼拝式の伝統。すべてが仕事時間と余暇時間、社会的時間と精神的時間、生物的時間と伝記の時間に強い循環する影響を与える（Inhetveen 1988. Verdier 1982, 336 頁以下）。

しかし、それらはまた、女性たちの認識の様式や解釈のモデルにまで及ぶ影響ももっている。例えば、人の人生は、反復不可能な線形的な発達としてではなく、成長と衰退のように、発展し消失していくものとして認識されている。あらゆるものが通過するときにすでに再び帰路にあるとするのが、周期的な時間概念のひとつの特徴である。

しかし、もしあらゆるものが繰り返すと仮定できるのであれば、困難な時には来るべきよりよい時を待つことができる。この文脈のなかで私たちは、伝統的な農村地域に非常に特徴的な、女性たちの時間に対する辛抱強い態度と予定された時間からはずれて出来事が起きることから引き起こされるショックとを理解することができる。

こう考えるなら、しばしば文献のなかで指摘されている農業者たちのいわゆる政治的無関心は、次のように解釈できる。すなわち、人が‘ナチ’でなくとも、ファシズムの下で平穏を保つことは、‘不滅の帝国’さえやがては通過していくであろうという希望と期待に結び付けていた。“そして第三帝国が終わった後、第四帝国があらわれました。”あるイ

インタヴューは政治体制の興亡のリズムをこのように要約した。

なおひとつの側面がある。

こうした時間を周期的なかたちへつくりかえる力は、自然や家族や教会によって外部から与えられる。人は個人としてまた集団のなかでそれらにとけ込んでいかなければならない。個人的な時間を形成したり主観をもったりする余地は殆どない。

通常よく知られているものの反復が規範である。独創的で独自性をもったものはこの枠組みのなかで、またしたがって女性の人生のモデルのなかで、調整を受けざるを得ない。

これが常態となっているために、彼女たちには個人的な願望や計画をもつ余地が殆どない。個人的な願望や計画はしばしば逆境の下で放棄され、あるいは娘たちに投影される。驚いたことに、ライフストーリーを語ったり聴いたりしているときに時間を専有している感覚があらわれてくるのはごく稀なことであった。

画、あるいはキルトとしての人生を送るには、まとまった完全な芸術作品は必要とされない。作品の細部は興味ぶかく、他の人たちがあらわれてその作品を作りつづけるだろう。‘私たちという文脈’のなかでは、独創性に関する問いは大変遅れて生じてくる。

### ライフストーリーあるいは 人生のストーリー

調査対象となった農村女性にとって自らの人生を連続的に広範囲にわたって表現しようとするのは容易なことではなかったが、彼女たちは人生のストーリー (stories of life) を語るのが好きであった。彼女たちは日常生活や特殊な状況の下での小さなエピソードやもう少し大きな出来事についてまとまった描写をした。

この種のストーリーの語りは、伝統的な村社会の社会文化的な生産・再生産に密接に関

連しているようである。どの家族にも独自のストーリーがあり、隣接する村々についても、信仰を異にする村々や見知らぬ人びとについても、同じくらいたくさん語ることがある。ストーリーは社会的役割を配分・強化し、アイデンティティを明確化・強化する限りにおいて、‘社会的に生産的な’ものである (Harding 1975)。

ストーリーが語られるのは、単に何かを知らせたり、人を楽しませたり、例を示したりするためだけでなく、ある議論やモラルポイントを支持するためでもある。ストーリーは農村のコミュニケーションの基本的な形態である。

日常生活やストーリーのまとまった形や激しさに関していえば、ストーリーは記憶の放射状に結合した構造に適合している。だから、ストーリーは容易に想起されまた語られる。

ストーリーを語ることは創造的な所作である。人生の叙事詩やドラマが再整理され修正される。ある部分を除外したりふくらませたり、また新たに強調したり陰影を加えることで、どのような機会にであらうと誰に対してであらうと、何を意図して語るのであらうと、ストーリーを容易に順応させることができる。

話題を選択する際に、語り手のジェンダーが重要な役割を果たす。

インタヴューを受けた女性たちは、家事や子育て、隣人や村の日常生活について、人生の驚きや苦労について、また病気や生や死についてのストーリーを好んだ。

彼女たちは人生の社会的な側面を強調した。農業労働や、例えば村で初めての送水管の建設のような技術的な出来事について語るときでさえ、彼女たちは自らの、また他の村人たちの系図のネットワークのなかに入っていく途方もない能力を示しながら、関係についてのストーリーを作る傾向にあった。

女性たちの語りのもう一つの特徴は、秘義のストーリーであった。女性たちが語る秘義

のストーリーは、超自然的な出来事をめぐって伝えられたストーリーだけでなく、家族や村の誰かが経験した奇跡の物語でもあった<sup>(4)</sup>。

人生のなかの素材から語られたストーリーには、農村研究をすすめていく上での体系的な価値がある。ストーリーのなかには村でどのようなリアリティが形成され村人たちがどのようにそれに折り合っているかがあらわれている。

研究を開始したばかりの頃、私たちはしばしば、男性のインタヴューの従軍行についてのストーリーや、女性たちの病気についてのストーリーのような、私たちの関心を故意に妨害するかのような多くのストーリーに耐えがたい思いをした。時間が経つにつれ、私たちはむしろこうしたものを村の生活や女性たちのリアリティおよび宇宙観を分析するために不可欠な素材とみなすことができるようになった。

### 伝記を語る

——真実を語っているのだろうか？

上述の2つの研究プロジェクトでは、今日の歴史的諸過程を実証し再構成するために他ではなくライフストーリーの資料を用いた。したがって、次の2つの点において伝記的資料の真実性 (authenticity) あるいは真実 (truth) に関する問いが生じてくる。すなわち、‘現在の私’が行なう伝記的説明は、どのように正しく‘過去の私’の経験を反映しているのだろうか (von Engelhardt 1990, 25頁)。また過去の経験は実際に‘客観的に’生じた出来事にどの程度近似しているのだろうか。

最初の問いに関して、私たちはまず現時点で語られた経験と過去に実際に生じた経験とのあいだに純粋に相同的な (homologous) 関係を想定することは決してできないのだということに留意しなければならない。しかし、

一定の条件の下で相対的な相同関係を期待することはできる。

広範な生き生きとした (scenic) 素材を扱う——例えば、直接話法を用いたり内的独白を用いたり史的現在を色彩ゆたかに用いたりすることによって——説明は、報告的で記述的な技術を用いた説明に比べて、後の経験や個人の解釈によって影響を受けることが少ない。生き生きとした語りのなかでは、過去に比較的直接的に没入していく——そうなれば過去の経験が全く正しく語られ得る——ことになる。

しかし、伝記的な語りは、一般に、生き生きとした語りのみからでなく、報告的で記述的な語りの節からも成っている。各々がどの比率をとるかは、個人的あるいは社会的な環境によって異なる。

私たちの研究対象となったストーリーの語り手たちをとりまいている伝統的な農村の農業者の環境を強く特徴づけていたのは、生き生きとした語りであった。したがって、当然のことながら、伝記的な資料のなかに生き生きとした語りがしばしば見い出される。

過去を回顧することが経験を加工する一方法であるとよく知っている語り手たちは、彼女らの意見によれば経験が歪曲されないようにし、特に真実性ある真実にする表現——“私はそれが今日起こったかのように思い出します”のような——を用いて、そうした経験を強調する。驚きや喜び、苦痛、恥といった深い感情がこの例である。“そのときとちょうど同じように感じます!”。

もし伝記的資料を分析する第一義的な目的が歴史的な真実性を確立することにあるのなら、私たちはそうした生き生きと語られた‘情緒的な’ストーリーから励みを得ることができる。

第二の問いは明らかに、ひとつの客観的な真実が存在するという仮定にもとづいている。したがって、リアリティある一定の諸経験に

客観的に正確であるという保証を与える体系的な一過程もまた存在しなければならない。

同時に、真実 (the truth) は超越的な歴史であると仮定される。すなわち、全時間を通して同じものでありつづけるということである。とすれば、歴史編集のための伝記的な語りの分析は、この真実に接近することを第一義的な目的とすることになる。

しかし、最近の研究は、この立場を大幅に修正してきた。哲学者や社会学者や歴史家たちは、どの社会にも複数の真実があり、その各々が他とは相異なりまた他と同様真実のようである (Veyne 1987, 108 頁) こと、そして一人の個人のなかにさえさまざまな真実が共存し得ることを指摘してきた。Veyne (1987, 107 頁) は、“真実は多極のなかに存在し相似的である”と述べている。

このことを、経験の客観性 (経験を正しく描写するための必要条件としての) という問いに当てはめるならば、故意に歪曲したとき以外は‘真’あるいは‘偽’は原則的に存在しない、ということになる。

このことは、歴史的に完全に正しいかのように思われる年代にさえ妥当する。例えば、自らのストーリーのなかで夫が帰家した1947年に終戦を迎えたとする女性農業者は、嘘をついているのだろうか。

経験された <sup>リアリティ</sup> 現実 は感覚によって受け止め、関心によって濾過し、再構成された規準にしたがって体系化し解釈したものである。すべて真実である。ある出来事に関する、一人の個人の異なるストーリー。彼女らの村の生活に関する記憶のなかにある、将来の世代が伝承していくであろうストーリー。村の状況についての真実味ある説明を、‘上記のことがら’とする政治役人の記録資料。農村の役人が受け止めた真実は、ときおり行政上の真実と食い違う (Broszat 1977, 166 頁以下)。

インタビューによって得られた資料を分析する際に、私たちは通常個々人の伝記的な語

りが‘村の神話’や役人の報告と本質的に一致していることに気づいた。この事実は、ふり返ってみるとナチ期のようにいろいろなものが噴出してくる激しい話題を扱うときにさえ口述史のアプローチを採用するのが正当であることを示している。

しかし、私たちの社会学的な分析にとっての‘平均的な産物’よりも益するところ多いのは、ひとつの語りのなかにある特別な偏差と相違、強調や付加や削除、基調と評価といったものであった。私たちはそうしたもののなかから個人と社会集団、また農業者たちの世界を構成するのに用いられる原理についての視点を得た。

ある人間の特性は、その人が男性であるか女性であるか、若いかな年長であるか、カトリックかプロテスタントか、豊かであるか貧しいか、どの村の出身であるか、といったこととはかかわりなく、行なう説明、語るライフストーリーあるいは人生のストーリーのなかに、十分にあらわれている。そうした特性から、物事の見方——それ自体が有効な‘真実’であり得るのみでなく、ストーリーを語っている本人が真実であると信じ得る——が成り立っている。

インタビューをしている際に、私たちはしばしば‘嘘’は語られていないのだと確信した。自らが真実 (the truth) を語っているのだと主張する人はいなかったけれども。

このことは、ナチ期に関連した話題にふれる際に、ストーリーが尋問の状況——尋問のときにはたったひとつでも嘘をついていると疑われないようにすることが最も重要になる。ひとつ疑われはじめると、何もかもが疑われることになりかねないからである。——と関連づけられる、という事実の一部帰せられるかもしれない。しかし、‘嘘がない’ということは、人生のなかの素材から語られるストーリーは決して唯一の真実なのではなく、むしろ多くの相似的な真実のなかのひとつである、

という事実を反映してもいるのかもしれない。

注. \*本稿は、1988年10月にノルウェイのトロントハイム大学で開催されたセミナーで発表した草稿をもとにして、加筆・修正したものである。筆者を招聘し、ノルウェイにおける女性農業者の状況を背景にして自らの調査経験について議論する機会を与えて下さった Reidar Almas 氏およびスタッフの一同に感謝する。

- (1) 明らかに、女性たちの社会的な年齢や伝記上のこまごまとした出来事を想起し表現する能力には個人差がある。過去の自我がライフサイクルのどの段階である状況に直面するかが、特にその状況がどのように経験され、事後に評価され、現在の自我によって表現されるかといったことにとって重要である。しかし、調査対象となったのは、皆——第二次世界大戦後に生まれた若い女性たちさえ——、伝統的な農村の生活世界を生きてきた女性である。彼女たちの伝記の語りを比較する際に、この均質性が基礎にある。
- (2) もちろんこの率は現在ではもう少し低いだろう。しかし、農場との強い紐帯を継続するそうした衝撃的な例を生み出すのは、まさに家族農業の危機であり、また農場を放棄する——ある世代が自然に農場を譲り渡す時となる前であっても——必要性なのである。
- (3) これは決して小規模農の女性農業者に限られたことではない。それは伝統的な生活と何らかの接触をもつ人びとや社会的な実体がいる、経験を想起し提示するときのひとつの型である。年長の人びとや農村地域に住む人びとの伝記にみられるこの型にはバイアスがかかっているように思われるが、それはまた、都市の労働者や女性についても妥当する。その形跡は、殆どあらゆる伝記的な語りにおいてみられる (von Engelhardt 1990, 36 頁以下)。私たちは、扱っているサンプルに伝統的な志向 (農村的、女性、年長者) への収れんがみられる限りにおいて、伝統的な語りの型への極度に高いバイアスのかかったサンプルを提示しているのだと主張する。
- (4) 男性たちの語りは、例えば年季奉公や仕事の経験、女性たちが語ったのとは異なる世界大戦の諸局面、村や地域における技術革新、隣接する村のあいだの儀礼的な諸関係といっ

た、他の出来事を強調していた。

#### (文 献)

- Bahrtdt, H.P. (1975), *Erzählte Lebensgeschichten von Arbeiten*, in M. Osterland, Hg., 9-37.
- Beck, U. (1986), *Risikogesellschaft. Auf dem Weg in eine andere Moderne* (Frankfurt am Main: Suhrkamp).
- Bertaux, D. & M. Kohli (1984), *The life story approach: a continental view*, *Annual Review of Sociology*, 10, 215-237.
- Broszat, M. et al, Hg. (1977), *Bayern in der NS-Zeit. Soziale Lage und politisches Verhalten der Bevölkerung im Spiegel vertraulicher Berichte* (München & Wien: Oldenbourg).
- Deenen, B. van et al (1982, 1983), *Europäische Landfrauen im sozialen Wandel. Ergebnisse empirischer Untersuchungen einer internationalen Arbeitsgruppe*, 2 Bände (Bonn: Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität).
- Endruweit, G. & G. Trommsdorf, Hg. (1989), *Wörterbuch der Soziologie*, 3 Bände (Stuttgart: Enke).
- Engerhardt, M. von (1990), *Biographie und Identität. Die Rekonstruktion und Präsentation von Identität im mündlichen autobiographischen Erzählen*, in W. Sparn, Hg.
- Fischer, W. (1989), *Biographieforschung*, in G. Endruweit & Trommsdorf, Hg., Band 1, 98-102.
- Gestrinch, A. et al., Hg. (1988), *Biographie-sozialgeschichtlich* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht).
- Harding, S. (1975), *Women and words in a Spanish village*, in R.R. Reiter, ed., 283-308.
- Inhetveen, H. (1988), "Schöne Zeiten, schlimme Zeiten". *Zeiterfahrungen von Bäuerinnen*, in R. Zoll, Hg., 193-217.
- Inhetveen, H. & M. Blasche (1983), *Frauen in der kleinbäuerlichen Landwirtschaft*

- schaft (Opladen : Westdeutscher Verlag).
- Inhetveen, H., U. Schlude & W. Erler (1987), Frauen, Dorf und Nationalsozialismus. Erkundungen im Fränkischen Jura, unveröffentlichtes Manuskript (Erlangen).
- Jahoda, M., et al (1975)., *Die Arbeitslosen von Marienthal. Ein soziographischer Versuch über die Wirkungen langandauernder Arbeitslosigkeit* (Frankfurt am Main : Suhrkamp).
- Osterland, M., Hg. (1975), *Arbeitssituation, Lebenslage und Konfliktpotential* (Frankfurt am Main & Köln : Europäische Verlags-Anstalt).
- Planck, U. (1989), Land- und Agrarsoziologie, in G. Endruweit & G. Trommsdorff, Hg., Band 2, 390-397.
- Reiter, R.R., ed. (1975), *Toward an anthropology of women* (New York & London : Monthly Review Press).
- Sackstetter, S. (1988), Normen und Leitlinien lebensgeschichtlichen Erzählens von Frauen eines württembergischen Dorfs, in A. Gestrich et al, Hg., 126-141.
- Schnapper-Arndt, G. (1975), *Hoher Taunus. Eine sozialstatistische Untersuchung in fünf Dorfgemeinden* (Allensbach & Bonn : Verlag für Demoskopie).
- Sparr, W., Hg. (1990), *Wer schreibt meine Lebensgeschichte ? Biographie, Autobiographie, Hagiographie und ihre Entstehungszusammenhänge* (Tütersloh : Gütersloher Verlagshaus).
- Verdier, Y. (1982), *Drei Frauen. Das Leben auf dem Dorf* (Stuttgart : Klett-Cotta).
- Veyne, P. (1987), *Glaubten die Griechen an ihre Mythen ?* (Frankfurt am Main : Suhrkamp).
- Voges, W., Hg. (1987), *Methoden der Biographie- und Lebenslaufforschung* (Opladen : Westdeutscher Verlag).
- Wimschneider, A. (1984), *Herbstmilch. Lebenserinnerungen einer Bäuerin* (München & Zürich : Piper).
- Zoll, R., Hg. (1988), *Zerstörung und Wiederaneignung von Zeit* (Frankfurt am Main : Suhrkamp).
- ※ 本稿は、Heide Inhetveen., *Biographical Approches to Research on Women Farmers*, *Sociologia Ruralis* XXX-1, 1990, 100-114 の全訳である。
- 訳稿の作成途中に有益な助力を下さった篠浦光 (農業総合研究所) および佐藤百合香 (東北農業試験場) の両氏に記して感謝したい。ただし、あり得る誤訳等についての責任はすべて訳者にある。